

土臺と上部構造 (二)

——「經濟學教科書」序文をめぐつて——

永 山 武 夫

三 新しい理論の疑問點

「言語學におけるマルクス主義について」の論文が發表されて以來、ソヴェエト、その他においては後述するように土臺と上部構造の問題に關して、この論文の解釋、またはこの論文に従つて從來の理論を修正する仕事が行われてきた。この論文の持つている積極的な役割についての評價が、どのように行われてきたか、またどの點を高く評價すべきであるかについては、前號で若干ふれたところである。

スターリンの遺したこの問題についての業績を認めるのにやぶさかではないが、しかし筆者は、ソヴェエト、その他で行われてきたこの新しい理論の全面的容認には疑問を残している。しかもその重要な疑問は筆者等の周圍を現在とりまいてゐる日常的な經驗や、理論に對する解釋の仕方にあるのである。

スターリンは前號においても引用したように、上部構造の持つ役割を次のように述べてゐる。「上部構造が土臺によつてつくられるのは、土臺に奉仕するためであり、土臺が形成されつよくなるのを能動的に援助するためであり……」（傍點筆者）この規定は果して正しいと言えるだらうか。上部構造は土臺によつてつくられるものであるとしても、その自らのよつて立つ土臺を援助し、強化するものだけであらうか。例えばマルクス主義は一つのイデオロギ

一であり、明らかに上部構造であると思われるが、しかもそれは資本主義經濟制度を土臺として生まれてきたものであるが、自己の土臺を強化するのではなく、逆に資本主義經濟制度の弔鐘を理論化している。資本主義社會の勞働組合や進歩的政黨等も上部構造に入るが、それは自己の土臺をほりくずす役割を持つてゐる。スターリンのこのような間違つた規定は人々の解釋を混亂させ、また現實の理解を困難にする。例えば、事實の問題として、マルクス主義や勞働組合、進歩的政黨等が資本主義經濟制度を土臺とする上部構造であることを認めぬわけにはゆかないが、他方このようなスターリンの規定もあるので、それらを上部構造であると言いきれず、苦しい解釋をしたり、勇敢にもそれらを上部構造から除外したり、またはその問題にふれずにごしごししてしまふ教條主義的混亂がみられた。「經濟學教科書」の序文がこの點にふれないでゐるのは、消極的な意味での教條主義の一つのあらわれではないかとも思われる。

(一) グレーゼルマンは「上部構造的」云々という表現の仕方で、この間のギャップを埋めようとしているし、エルスナーは「新しい上部構造の要素」(傍點筆者)という説明の仕方をする。

このスターリンの規定は、もつ一つの彼の規定、「上部構造は、ある經濟的土臺が生きてはたらく一時代の產物である。だから上部構造が生きてゐるのは長いことではなく、ある經濟的土臺の根絶と消滅とともに、根絶し消滅する。」という、上部構造の壽命についての規定と相俟つて、現實理解の困難さを増すことになつたのである。實際にはマルクス主義理論はもちろん、進歩的政黨、勞働組合等、右にあげたこれらの上部構造は、資本主義的土臺が廢絶され、新しい社會に入つても上部構造であり、むしろ中心的、支配的な上部構造となるのである。

とはいえ、スターリンがまつたく階級社會における被支配階級の觀念、理論を低く評價したと言うのではない。「觀念、表象、道德、道德原理、宗教、政治がブルジョアとプロレタリアとでは正反對である」というのは、まつたく

(三)「ただし。」と指摘していることからみてもその點は明らかである。問題なのは、かかる正しい指摘をしながらプロレタリア的な觀念、理論、組織等も上部構造として規定せず、ただブルジョア的の上部構造のみを資本主義社會の上部構造と定義づけていることにある。敵對的な階級社會においては、それらの階級對立、階級的利害は、上部構造にも反映すると考えるのが自然であろう。資本主義社會では、ブルジョア的な上部構造だけが、その社會の全部的な上部構造として成立するのではない。資本主義經濟制度は土臺のうえに成長し、發展してゆく上部構造でありながら、資本主義を守り強化するのではなくて、労働者の利益を守り、新しい社會の建設を目標としている上部構造も存在するのである。この兩者は土臺における勞資の物質的關係、兩者の對立と統一を反映しているものであつて、ばらばらの存在なのではない。この點についてはマルクスの正しい説明を再評價すべきであろう。

「さまざまな財産形式のうえに、社會的生存條件のうえに、獨特のかたちをとつたさまざまな感覺、妄想、考えた、人生觀の上部構造がそびえたつてゐる。それは階級全體が自分の物質的基礎とそれにおうじた社會關係からつくりだしてかたちづくるものである。」(四)

筆者は、階級社會における上部構造の階級性を認めるべきだと思ひ、それも資本主義社會においては、ブルジョア的、およびプロレタリア的という二つの劃然と二分されながら統一されている上部構造だけがその社會に存在しているのではなく、現實の資本主義經濟制度は生産關係の總體には、ブルジョアとプロレタリアという全く對立した二つの階級のほかに、中小商工業經營者、小農民、インテリゲンチヤの多數が存在し、それら全部が生産關係の總體を形成しているのであるから、これを土臺とする上部構造も、基本的にはこれに相應した複雑なさまざまな利害關係を持つものとして成立していると考へたい。しかしまたそれらの複雑な上部構造は單に雜多に集合されて出來ているのではなく、階級社會においては支配階級の觀念、理論、機關等が支配的なものとなつてゐることは強調され

なければならぬと思う。

「支配階級の思想はいずれの時代にあつても支配的な思想である。すなわち、社會の支配的な物質的な力であるところの階級が、同時にその支配的な精神的な力なのである。物質的生產の諸手段を支配している階級は、これによつて同時に精神的生產の諸手段をも自由にする。」
(五)

今日、反戰平和の運動が世界的な規模で行われており、平和擁護の思想が高まつているが、この運動は明らかに、資本主義經濟制度の中にある戰爭の不可避性と對立するものである。しかし戰爭の不可避性といつても、それは資本主義經濟機構そのもののもつ不可避性なのであり、従つてそれはこの機構を維持強化してゆきたいと考える支配階級にとつての不可避性なのであり、支配階級の上部構造にそれは理念として反映されてゆくのである。反戰平和の思想は、資本制機構に拘束された矛盾關係にありながら、同時にそれに反撥している労働者階級を中心とした被支配階級のもののなのである。この思想は、階級社會にあつてその土臺の上に成立した被支配階級の上部構造となつてゐるのである。そして彼等は意識的に積極的に、資本制經濟のもつこの戰爭の危険に對決し、自分等を守ろうとしてゐるのである。今日の階級社會における上部構造のこの矛盾對立した姿こそ、階級社會における上部構造の對立的性格、土臺に對する相對的獨立性、さらに一層、上部構造の土臺に對する積極的な働きかけ等を示す、すぐれた例證とみることできよう。被支配階級の上部構造を認めようとしなないエルスナーも、この問題で労働者階級が果している役割についてには次のように高い評價を與えている。「戰爭が今日、資本主義社會の土臺である經濟構造のなかに根因をもつてゐることは、なんのうたがひもない。…略…全上部構造が經濟關係の受動的模寫にすぎないとするならば、そのときには上部構造は能動的に經濟關係に作用できないであらうし、また戰爭が實際に不可避となるであらう。というのはそのときには帝國主義の經濟法則が、宿命的な不可避性をもつてつらぬきとおすだらうからである。そのときにはま

た、資本主義の胎内に成熟している新しい上部構造も、このことを、どうにもできなくなるであらう。だが……略……平和の觀念がますます廣はんな大衆につかれ、平和のためにたう諸組織が全面的に強化され、帝國主義的戦争放火者がその上部構造の力を戦争のためにもちいることが不可能になるとときには、戦争がさけられることが、わかるのである」^(六)

第二の問題として、「經濟學教科書」にしろ、スターリンにしろ、前に述べたように上部構造は土臺とその運命を共にする、という上部構造の壽命に關する規定に言及しているが、マルクス主義とか、進歩的政黨ないし労働組合等という上部構造が、前述したように資本主義社會においても上部構造であるとすれば、それらが新しい社會に入り土臺が變つてもなお一層支配的な上部構造として存続するのはどう考えたらよいのか。

「經濟學教科書」や、スターリンのこの規定をもつてしては現實を理解することは出来ないし、考え方も機械的であると思う。新しい上部構造が根本的には新しい土臺の性格に規定されるものであることは疑いを入れぬところであると思うが、何時の時代轉換に際しても新しい上部構造は、舊社會の上部構造の一部を受け継ぎ、さらにその内容を新しい土臺に相應しいものに修正しながら形成されてきたのである。ことに舊社會における被支配階級の上部構造は、その被支配階級が新しい社會において支配階級になる場合には、彼等のもつ上部構造は新しい社會において彼等の土臺を強化せしめる限り受けつがれて支配的上部構造となるであらう。しかし逆に舊社會を轉換せしめる大きな原動力となつたような被支配階級であつても、新しい社會で彼等がふたたび被支配階級となるような場合には、その上部構造は新しい社會になつても支配的な上部構造とはなり得ないであらう。一括していえば舊社會の上部構造は、それが新しい社會においても新しい土臺と生産關係の總體の何れかを強化する限り變容しながらも繼承されるものであらう。

マルクス主義理論のような、資本主義を土臺とした労働者階級の上部構造が、新しい社會において受けつがれ支配的なものとなる理由も、右の如く上部構造の歴史的繼承性として理解されるべきであらう。教條主義的傾向をみせた多くの論者が、とくに文化的遺産の問題を取りあつかう際に、スターリンの「根絶し消滅する」理論に突き當つたのも不思議ではないのである。

註(一) グレーゼルマン著藏原惟人、上田俊一譯「上部構造論」

(二) エルスナーは「上部構造は、ある經濟的土臺が生きてはたらく一時代の産物である。だから、上部構造が生きているのは長いことではなく、ある經濟的土臺の根絶と消滅とともに、根絶し消滅する」という、前に引用したスターリンの規定から次のように問題を展開する。「新しい、上部構造は、わが國でも、ヒトラー・ファシズム獨占資本の支配が根絶され、民主主義的諸勢力が自由に發展できるようになつた新しい時代に、はじめて發生することができた。」もつともここでエルスナーの考えている「新しい上部構造」の内容は、この引用文の前後の關係から、主として東ドイツの新しい國家機構、新しい民主主義的な法律體系を意味しているようにもとれる。その限りでは、これらの新しい上部構造は、新しい時代、すなわちドイツ民主共和國の誕生という新しい經濟制度を土臺として成立していることは明らかである。しかしさらにエルスナーは、マルクス主義や進歩的政黨のことも言及して次のように説明している。

「われわれが見てきたように、上部構造は、ある一定の時代の産物で、一定の土臺に對應するものである。だが、いまだ、プロレタリアートの階級的イデオロギーとしてのマルクス主義、およびマルクス主義労働者黨が、資本主義という時代に發生したものであることは、一般に周知のことであるう。

うたがいもなくプロレタリアの觀念、理論、科學的社會主義、ならびにプロレタリア黨やその他の諸組織は、上部構造にぞくしている。うたがいもなくそれらは、資本主義の土臺が存在している時代に發生し、發展している。そこで若干の同志諸君はマルクス主義を資本主義の上部構造にかぞえられることによつて、ここに矛盾をみいだし、これを解こうとした。そこでその結果必然的にこれらの同志は、マルクス主義を資本主義的階級イデオロギーとみなさざるを得なくなつた。」

彼はマルクス主義や、労働者黨が資本主義「の土臺が存在している」時代に發生し、發展していることを認め、また、これらが「うたがいてもなく」上部構造にぞくしていることを認めながら、なお資本主義の土臺の上に立つ上部構造であることを否定しようとしているのである。しかも彼は當然のことながら、マルクス主義理論や労働者黨の存在意義は高く評價しているのである。

「周知のように、資本主義的生産様式は敵對的矛盾によつて特徴づけられ、この敵對的矛盾はブルジョア對プロレタリアートの階級對立にあらわれている。土臺そのものも、この矛盾を、階級敵對性をふくんでいる。それに應じてこの矛盾は、上部構造にもうつされるのである。資本主義的上部構造、ブルジョアの觀念、ブルジョア國家が成立するばかりでなく、それと同時に新しい進歩的な觀念、理論、ならびに政治的その他の諸組織が成立して、これがプロレタリアートの階級條件に照應するのである。この發展は、まづたく社會發展のうえでおこつてきた物質的要求に即應するものである。さらにそれ以上に、それはまさに、その後の發展の條件となる。というのは、こういう觀念、組織などがなければ、古い上部構造や古い土臺はまづたく絶滅されないだろうし、それ以上の社會發展も不可能となるであろう。」

右の引用文においても、「ブルジョアの觀念、ブルジョア國家を「資本主義的上部構造」であるとはしているが、「新しい進歩的な觀念、理論ならびに政治的その他の諸組織」は、土臺の矛盾を反映して「成立し」「プロレタリアートの階級條件に照應」するとは言うが、上部構造として、成立するとは見ていないようである。ではエルスナーは、これらの點をどのように整理しようとするのか。彼は「プロレタリアの觀念、理論、科學的社會主義、ならびにプロレタリア黨やその他の諸組織は」「うたがいてもなく」「上部構造にぞくしている。」と考えている。彼の場合、これらのものを上部構造として成立させる土臺となるのは、新しい土臺、すなわち、社會主義社會、人民民主主義社會を考慮にしているわけである。しかし現實の問題として、「うたがいてもなくそれらは、資本主義の土臺が存在している時代に發生し、發展している。」のであるなら、その時代の上部構造であるとして考えられないのか。エルスナーは、その間の矛盾を解決しようとして次のように説明する。

「ブルジョア社會における階級闘争は、古い社會（資本主義社會）の胎内に新しい上部構造の要素や、進歩的な觀念（例えばマルクス主義）と組織（例えば労働者黨）が成熟し、これがついに古い上部構造を、くわしくいえば、その決定的な部分である國家を絶滅し、新しい上部構造、新しい國家を確立し、この國家のたすけで古い土臺を絶滅して新しい土臺をつくりだす」

右のように古い社會内で發生する新しい社會の上部構造は、單なる「要素」にすぎないものと解釋され、その要素が「成熟」するだけであつて、あくまで社會が轉換するまでは、それらは上部構造とはみなされていないのである。（引用文は前掲「唯物史觀の所問題」所收エルスナー著「一般報告」邦譯四一―四三頁。引用文中傍點ならびに（ ）内は筆者）

（三） スターリン「辯證法的唯物論と史的唯物論」邦譯 國民文庫版 一五四頁

（四） マルクス・エンゲルス選集、大月書店 第五卷下 「ルイ・ボナパルトのブリュメール十八日」三一―五頁

（五） 同右、第一卷上「ドイツ・イデオロギー」五一頁

（六） エルスナー前掲書 五十頁

（七） マル・エン選集、第二卷下「共產黨宣言」五一―四頁

結

第二次大戰後の社會主義圈の飛躍的な擴大發展と、資本主義諸國の危機の一層の深化を前提として、平和革命―國家權力の平和的轉換―上部構造の變革、の問題が提起されてきている今日、上部構造論を一層ほり下げる實踐的な意義が認められる。そしてスターリンのこの問題における業績が大きな影響を與えているだけに、上部構造論を進めるための一助としてその業績の再検討が必要であらう。また再検討にあたつてはあくまで現實を足場とし、實踐的な課題に少しでも答え得るものでなければならぬだろう。そのような觀點から日頃思いついていくつかの問題を整理

理したものがこの小稿である。

補足になるが、二節で述べたように資本主義から社會主義への轉換にあたつてはそれ以前の時代轉換とは異なり、資本主義社會の内部に新しい社會の土臺は發生して來ないのであるから、この轉換はまず政治的變革の形をとり、そこに生まれた新しい上部構造が積極的に新しい土臺と、その他の新しい上部構造の建設を始めてゆくことになる。しかしこのような轉換が行われるためには「經濟學教科書」でも指摘されていたように、物質的前提が必要である。この物質的前提は、階級社會への變革の場合にはそれ以前の社會内部に新しい社會の土臺が發生し發展するといふかたちで成熟してゆくのであるが、社會主義への變革の場合は物質的前提條件はどうなっているか。發展しつつある生産力と、今やそれに對するかせに變じた古い生産關係との矛盾、この資本主義的生産關係と生産力との矛盾、そしてその矛盾を反映しその矛盾が轉化された生産關係内部における矛盾の激化……これが新しい上部構造＝國家權力の轉換を條件づける物質的前提であると思う。コンスタチーフは次のようにいつている。

「人類社會の歴史は、生産力が、その發展の一定段階で、壽命のつきつつある生産關係と衝突するようになるということを證明している。新しい生産力と、壽命のつきつつある生産關係とのあいだに發生する衝突は、社會革命の經濟的基礎である。」^(八)

(八) コンスタチーフ監修「史的唯物論」邦譯第一分冊一二三―四頁